

「権威ある新しい教え」

「新しい」という語を辞書で引いてみました。「新しい」の対義語は「古い」。新明解国語辞典によれば、「新しい」の第一義は「何かが行なわれて（始まって）からあまり時間がたっていない状態だ」。第二義は「そのものに、今まで他のものには見られなかった性格・面が認められる様子だ」。

この意味を踏まえて、人々がイエスのことを論じ合った時に発せられた「権威ある新しい教えだ」（マルコによる福音書 1:27）という言葉について考えてみましょう。この「新しい」が第一義的な意味だとすれば、イエスの口から発せられて時間が経っていないという意味になります。どうもしっくりきません。では、第二義的な意味だとすれば、イエスの口から発せられた言葉が、「今まで他のものにはなかった」面を持っていたということになるでしょう。

それはどんな新しい面だったのでしょうか。読み解くヒントとなるのは、「人々はその教えに驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者のようにお教えになったからである」（マルコによる福音書 1:22）という状況描写です。「律法学者のように」教えることは当時、誰もが知る聖書の解き明かしの方法でした。比較されているのが「権威ある者のように」なので、律法学者の教え方は「権威がある」ようには見えなかったことになります。

同じく新明解国語辞典によれば、「権威」の第一義は「ずば抜けた実力や すぐれた判断力の累積によって支えられた、他を威圧し、追従せしめる人がただよわせる雰囲気。また、そのような雰囲気をただよわせる人」。第二義は「卓越した情報分析能力や、隔絶した知識の集積を下に研鑽にいそしむ人」。ここで、律法学者は知識の集積や分析は得意だったでしょうから、第二義的な意味ではありえません。ということは、イエスは単に言葉の意味を教えられるだけでなく、「他を威圧し、追従せしめる人がただよわせる雰囲気」で神の言葉を解き明かされたことになります。それは、その言葉を体現するイエスが発する全てが聞く者の耳と心とに届いたということです。そればかりでなく、単なる解き明かしでは聞こえてこなかった神の言葉そのものが持つ力が、聞く者に届いたということでもあります。

そもそも、神の言葉には力があります。「主の声は力をもって／主の声は輝きをもって」（詩編 29:4）いと詩人は歌っています。天地を震わせる力を常に漂わせている、と。しかも、「その言葉はあなたのすぐ近くにあり、あなたの口に、あなたの心にあるので、あなたはそれを行うことができる」（申命記 30:14）はずでした。

人は神の言葉と共に生き、神と共に歩むことによってのみ、平和で安全に生きてきました。ところが、その言葉が書き留められ、人間の言葉で解き明かされるうちにだんだんその威厳が失われ、単なる言葉だけが一人歩きするようになりました。神の言葉の力よりも人間の解釈の方が優先されるようになったのです。結果、近かったはずの神の言葉が、いつの間にか遠くに感じられるようになっていきました。神の言葉が、神の思いが古びているように勝手に思い込んでいたのです。

「教会に行っている」「聖書を読んでいる」と言う、「よくそんな昔のものを大切にできるね」と言われることがあります。この発言をした人の中では、聖書の言葉は、神の福音は、書き留められた時点で時間が止まっているのでしょうか。しかし、パウロは「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力です。神の義が、福音の内に、真実により信仰へと啓示されているからです。」（ローマの信徒への手紙 1:16-17）と、神の思いが、神の力が福音の内に生き生きと息づいていることを伝えています。

もちろん、私たちはこの真実を知っています。とはいえ、私たちもまた一個の人間に過ぎません。時に神の言葉を自分の枠の内側に収めてしまおうとすることもあられるでしょう。そうならないためにも、神の言葉を常に「権威ある新しい教え」として聞き続けるために、謙虚に、真摯に神の前に立ち続けたいと思うのです。

